Summertime Blues 2

はじめに

2011.09.17に公開した
「サマータイム・ブルーズ」の続編です。
http://p.booklog.jp/book/34054

こちらから読んでいただければ幸いです。
（短いです）

おはよう30歳のわたし、、、って、やっちまったー。

　鏡見ながら。”おはようわたし”とか、いまどきの高校生でもやらないだろお！
いつまで”夢見る妖精さん頭”なんだか。

て、ことを自虐的に考えてる自分がイタ過ぎる。

　うーん。誕生日って国民の休日になんないかなあー。この、乾かさないまま
そのまま寝てしまったぐちゃぐちゃの頭をみて、さあ、張り切って出勤するぞー、
にはならないよねぇ。

”さる”のやつ。ちゃんとやってるかなあ。

　おとぎ話だと、コビトサンたちが夜、おじいさんが眠っている間に素敵な靴
を作ってくれてるんだけど、、、”さる”だからなあ。素敵な靴は無理でも、そ
れなりのスリッパぐらいは作っといてくれれば、ま、いっか。

　コンペつっても、本命はうちじゃないだろうからな。なんでまた呼ばれたり
したんだろう。いまいち、意味わかんねー、つーの。

　寝癖直しで適当に直しときゃいいか。あの会社。なんかスキクナーイ。
雰囲気いまいち。仕事も地味ー、、、なんてね。”客を選ぶとか、10年早えーわ
馬鹿野郎。”、とか怒られそう。へへ。

　シリアルが流行りだからって買ってみてんだけど、なんだかこのフルーツの
色が、、、枯れたサラダ？みたいな。
　こんなのぐちゃぐちゃやってる間に、ビール飲んだほうが、よっぽどお腹膨れ
てやる気も出そうな気がするよ。いっそのことビールかけるか？

朝からビールって、アル中の第一歩だっけ。

　さあてと。あほなこと考えてたら、会社に行く気になってきたわ。別名諦めが
ついたともいう。
　今日はもう、ジーンズでいいや。白のワイシャツとジーンズ。男って白と紺の
組み合わせに弱いからねぇ。

ワイシャツってホワイトシャツの略だけどねえ、あはは、、、。

　ゆっくり行こうと思っているときに限って、道路の信号がぜーんぶ青だったり、電車が定刻通りについたり、お日様が昨日にもまして暑かったりするんだよね。

　ユキ、今晩ヒマかなあ。川べりの店でビールとかどうかなあ。あのチープな赤白水色の提灯、結構好きなんだよね。

送信、と！

ふんふん、、わ、早やっ！

”誕生日だろ。オトコ誘え。”

あの、くそアマー！
男誘えるぐらいだったら、あんたなんか誘うもんかい。ぷんすか。

あ、着いちゃった。

中、涼しい。この時だけは、ここが天国に思える。

おお、やってるやってる。
「ショーコさん、おはようございます。」

なに、そのやっちゃったかみたいな目線の先は、もちろんヘアー。
「ウミノ。今晩空いてる？」

「えー、朝来たばっかりで、もう飲みの話ですか。」
いや、飲むとは言ってない。食事かもしれないじゃない。ビールだけど。

「コンペに勝って、MILESで祝杯上げようと。」
「あー、今日はちょっとー。服おニューなんで、、、。」
どういう意味じゃい。
なんか、今日は避けられる日だなあ。仕事しろ、まっすぐ帰れってことかあ？

「サトルー、出来てる？」
おー、ひげだ。
こいつ薄い方だと思うけど、なんか新鮮ー、かつ汚い。

「おはようございます。できてます。」
自信ありげ、うさんくさ。

「どれどれ、」
「サバにおいてます。」

酢締めにするぞ、このやろう、、、あったあった。タイムスタンプは5分前。

あー、ふうーん、へー、おゃー？
「このイラスト、どっから？」
でっかい、あくびだなぁ。

「美大の同期に頼みまひたー。」
「へぇー、プロ？　夜中に？」

「じゃないです。雑貨屋で店員やってます。こういうの。ちょこちょこっと
　したイラストとか得意なんですよ。」

じゃあ、とりあえず著作権とかは大丈夫か。
「その子に悪いんだけど、いまんとこギャラでないよ。」
「お互い出世払い、ってことにしてあるんで。」

じゃあ一生無理、なんてね。

「わたし的に、ちらほらいじりたいとこはあるけど、ほぼオッケー。
　だから、もう帰って寝ちゃっていいよ。ごくろうさん。」

　まあまあ、だいたいはこれでいいとは思うんだけどね。ちょっとした
こだわりとか。”おことわり”入れとくとか。それに落選予定のコンペだし。

「直しってどれぐらいで出来ます？」
んー。

「1時間ぐらいかなあ。」
「じゃあ、出力と綴じまでやってから帰ります。ちょっとコーヒー飲んで
　きまーす。」
「お、ありがたいねぇ。惚れちゃいそうだよー。」

　まったく。なんかちょっとしたきっかけで成長するもんだなあ、若い子って。
あの人もそういうのが嬉しかったりしたのかなあ。

　昨日一回やってると、慣れてくるもんだなあ。昨日は気づかなかった
”誰が頼んだの？”ネクタイの柄とか、おっさん、あたまポマードか、とか。
資料見るときのくせとか。そういうのも見る余裕ができてきた。

だからって、何が変わるものではないけれど、

「地の色も赤とか黄色ではなくて、基本は白にします。そこに、水彩や
　パステル風のイラストで、お勧めのポイントを置いていきます。」

あんまり響いているような気はしないけど。

「回るポイントも、いわゆるサイトシーイングの観光名所ではなくて、
　その町に古くからある工房とか、醸造所とか、ファクトリーとか。
　　エクスペリエンスとしての空気感を感じられるところにしたいと
　考えています。いわゆる、ガイドブックともちがうところで、そう
　いうのがあまり取り上げない、目的地のオリジナリティでも勝負し
　たいなと思っています。」

普通に日本語で話せよ、ワタシ。

「なるほど、発見的な体験重視ってことですかね。」

若社長、いちおう反応してくれた。

「そうです。特に最近の若い女性は、”見るだけ”よりは体験と、その場で
　のコミュを好むようになってきていますから。」

「それはどういう裏付けがあるの。データとか。」

ねーよ、おっさん。わたしがそう言ってんだからそうなの。もう若くないけどね。

「ほら、ヤマジョとかレキジョとかっていうじゃないですか。」
「ああ、あれね。でも、結局はそれがどうツーリズムと結びついてくるか、
　だからな。
　　これ、結構大変だと思うよ。現地との調整も含めて。来年の4月には店頭に
　ずらーっとならべるの、間に合う？」

　１２月には印刷に回すとして、11月には決定稿。実質3か月で企画、折衝、
調整、シナリオ、レイアウト、、、あれは並行に動かすとして、うちのスタッフ
の数では、、、。

「1地域ならなんとか。でも、このお話は全国がターゲットですよね。申し訳
　ありません。」

だって、予定外のC案膨らましただけなんだもん（泣）。

「いや、企画自体は面白いんだ。僕たちもいろいろ勉強しないと、多様化する
　消費者の嗜好に置いてかれる。そうですよね植山部長。」

「ん、ああ、そうですね、社長。」

いっぱつ逆転、、、は無さそうだなあ。

まだまだ暑いなあ。山行きたくなってきた。

「ごくろうさま。」
「すんません、チーフ。取れなくて。」

　このくそ暑いのに、タクシーってなんでみんな黒。ボンネットで卵焼けるよ
きっと。陽炎立ってんじゃないの。

「まだ、決まったわけじゃないわよ。」
「なんだろう。C案て、わたしのやりたいことであって、あんまりビジネスの
　制約とか考えない案だったのに、それすっかり忘れてて。お客さんがとりえ
　ない案を持ってっちゃった。」

そういうA案は落ちてたし。

「面白いって言ってもらったじゃない。」
「でも、お客さんの時間も、うちらの時間も無駄にしちゃった。」
サルは徹夜までしてくれたのに。

「そうでもないわよ。」
「そうかなぁ。」
作業が楽しい、だけでいいんならね。

「会社を回すっていうのは、そういうことだけじゃないのよ。」
う。
「チーフ、なんか優しくて気持ち悪い。」

「こっから歩いてみる？」
わー、ごめんなさい。

　葉っぱが青いうちに、近場でどっか行ってみようかな。沢でもいいかも
しんない。水気持ちいだろうな。

今回のは、なんだかなぁ。
　こういうのもあるっていうのは、何年もやっててわかってるんだけど。
とれないとわかってる仕事でも、一生懸命やって、次に活かせればいいとは思うんだ。

　でも、あなたのところより他のが良かったです、って言われるのは、やっぱり
こたえるんだよね。じゃあ、どうすれば仕事取れたの、って。

自分に自信がない分、へこむんだよなあ。

　誰か一緒に行ってくれる人。”お前は方向音痴なんだから絶対一人で山へ入るな”、
とか、ほんと失礼だったな。自分は独りでずんずん行っちゃうくせに。

　脚力もついたし、地図だって読めるようになったし。でも、確かに独行はやめ
といた方がいい。何かあった時、帰れなくなるもんね。

まだ、１６：００かあ。

　時間経つの遅いなあ。落ちるとわかってたコンペでも、待ってる間は
イライラする。こういう精神状態だと、どういう仕事やってもうまくい
かないんだよね。

「ショーコさん、ちょっと見てもらっていいですか。」
「なに？」
「ライブのフライヤーなんですけど、何回も作り直してたら、これでも
　いいような気がしてきて。客観的に見れてないなーって。」
「あーわかるわかる。世の中そんなデザインで溢れてるもんね。力尽きた
　感みたいな。」

どれどれ、、、あーいい気分転換になるわー、笑えるー。

　これはちょっと、、、ギターメインで、後ろ爆発かあ。うちの平均年齢
じゃ無理なヤツかも。
「アマチュア・オジさんバンドなんですよう。８０年代とか資料見てもよく
　わかんなくて。」

そりゃ、２年目のこの子だけじゃなくて、チーフでも無理だわな。

「社長呼んでこようか。」
「ひぇー！」
「あの人、かろうじて９０年代ロック系、引っかかってるはず。」
「む、無理！」

　そんな、恐れ多いおっさんじゃないけどな。
社長いるかな。

「オイワちゃーん。」
来たかぁ。

　一応、形だけでも席まで行って聞こうかな。大声で話すようなこと
じゃないし。下のもんに、こういうとこだけ真似されても困るからね。

「来ました？」
「うん。向こうに決まったって。」

はーーーー。それなりにがっくり。

「残念会でもやります？」
「それが、そうもいかなくて。」
うちって、いまそんなに厳しいの。

「何度も来てもらって申し訳ないから、って、ちょっとした仕事出して
　くれるんだって。」
「マジ？」

こっくり。

「世の中には気前のいい会社もあるんだー。」
「ワタシの推測なんだけど。まあ、プレゼン資料だけでも結構ワークが
　かかってるじゃない。それ全部うちからの持ち出しとかにすると、変な
　噂流されたりとかね。そういうの心配してるんじゃないかな。」

「そんなことしませんよ。」
してやりたいけど。

「世の中にはそんな会社もあるってことでしょ、きっと。わたしらの業界
　って、噂広がるの早いし。」

　それで持ってるようなところもあるわなあ。あそこの仕事は、赤出るから
しないほうがいいとか、そういう情報。

「向こうの部長さんが、社長さんの意を汲んで、試験的にやってみましょうか
　って言ってくださったの。部数もページ数も限られるから、地域限定でって
　ことになるだろうけど、って。古い人だから、義理がたいんだわ、きっと。」

サルのやつ喜ぶだろうなあ。バナナとどっちが嬉しいかな。

「これー、サトルメインでやってみましょっか。」
「ワタシ的には、ショーコちゃんにやってもらいたいところなんだけど。
　うまく行ったら先が広がる話だし。」
「C案。私はアイデア出しだけで、ほとんどサトルがやったようなものだし。
　ちゃんとサポートしますって。」

なに、しんみりとした顔して。

「いまね、ちょっと重なって見えた。」
え。

「同じことするんだなあって。」
このやろう、こんなところで私を泣かす気かぁ。

「月曜にサトルが来たら、私から話します。」

「うん。それでいいわ。お願いね。」

さっすが週末、人いっぱいだなぁ。

　熱気とアルコールとグラスの音と声で、なんだかもう置いてかれてる
気分がする。まだ７時だよ、まったく。世間の人たち、いったい何やっ
てんの。
　５時ぐらいから飲んでんじゃないの。きっと１０分もしないうちに
追いついてるんだろうけどね。

川べりがいいんだけどなあ。席空いてるかなあ。

「ショーコさん、外行くんですか。」
「この煙だと肺がんになりそう。」
「えー、肺がんになる前に蚊に刺されますよ。」
「いないよこんな街中。」

肺がんより虫刺されを気にするのかあ。

「あ、あそこ行こ。」
　ラッキー。今日はついてる。朝の信号といい、商談といい、これで
今年の運を使い果たしたんじゃないといいけど。

「いらっしゃいませ。」
「生ビール二つ、と。」
「とりあえず枝豆とスティックサラダ。」

なんてストイックな注文。穀物と野菜のみ！

　でも、あとからシュラスコ頼もう。ああいうのは理性をちょっと無くして
しまわないと。もう、食べた脂肪がそのまま身につくお年頃だからね。

「よくとれましたね、あそこの仕事。わたし、仕事がらみで知ってる以外の
　名前の会社の仕事って初めてかも。」
「つっても、ローカル・メジャーだけどね。」

川風気持ちいいなあ。

　桜の季節は、外の席閉めてるんだよねこの店。店の雰囲気壊す客がいっぱい
来るからって。雰囲気だけならいいけど、手すりに乗ったり椅子壊したりする
ようなバカもいるんだろうなきっと。

「あたしも、取れるつもりはなかったんだけど。」
なんてことは、取れたから言えるジョーダンだよねー。

「チーフの耳コピなんだけど、あそこの若社長が親の代からいる古狸達と反りが
　合わないらしくて。親の代からの延長でやってることなんか、古くさくって
　やってられない、って乗りらしいんだ。」
「ああ、なんか聞いたことある、そういうの。」

「うちが呼ばれたのは、そういうわけ。」
「なんか、複雑。」

だね、、、。

最近、どこ行ってもジャズだなあ。ここは昔からそうだけど。

「ビールお待たせしました。それと枝豆にスティック、とおまけに
　ほうれん草の胡麻和え。」
「うーわ。店長自ら働いてんの？そんなに忙しいの今日。」
「違う違う。サイケデリック・デザインの人が来てくれてるって聞いた
　から、ちょっと顔見せに。」

意味わかって言ってる？　そのコトバ！

「そりゃどうも。それとうちはサイカ・デザインスタジオで、サイケデ
　リックじゃないって、何回言わせんの。」
「お約束、お約束。オタクの色使い好きなんだもん。」
「そりゃどうも、毎度ご贔屓に。」
「そろそろ”秋メニュー”出すから、またよろしくね。」
「じゃあ、カメラ抑えときますね。」

　マメだなあ店長。客商売って、やっぱりこうじゃないとね。わたしも
見習わないと、って毎回思ってるんだけど。
　とりあえず、水谷センセんとこ。タカミさんに連絡いれとこーっと。

「いまどき紙のパンフレットなのかなあ。旅行とかって、ネットで調べて
　予約しません？」

とりあえず、ちあーず。

「ネットなんてさ、まず視界に入んないんだよ。パンフレットなら、駅前
　とかに目につくように置いてあるじゃない。だから目立つ赤や黄色が
　多いんだろうけど。ネットはよっぽどの大手でも無ければ、検索にすら
　引っかからないんだ。」
「あぁ、若社長の気持ちがなんとなくわかった。」

　枝豆って、ほんと淑女の食べ物じゃないよね。指は汚れるし、殻は山盛りに
なるし。でも、この子のネイルのピンクと黄緑って、ちょっとそそる配色かも。

「ネットっていう新しいチャネルはできたけど、ますます大手に有利になるだけ。
　旧態然としたパンフレットには将来性が感じられない。でも、業態からしたら
　捨てることもできない。そんなとこかですかねー。」

そんなとこでしょうねー、ウミノさん。

「旅行パンフレットって、読み物としてどうなの？　って、思わん？」
「えぇー、あれ読み物ですか？」
読まないよなあ。見るかもしれないけど。

「文字詰め込みすぎだし。写真ちっちゃくてわかんないし。」
「綴じのあるチラシ、ですかね。で、ショーコさんプランつーのは？」

私ら、ほんと真面目だね。飲みに来て仕事の話だよ。

「イラスト中心にして、写真は使わないの。文字も少なめ。でも、QRを
　パチっとするとネットでfacebookとか、インスタにつながるっていうの。」
「あー、それって、電車の中でちょい見して、スマホ使ってっていうのイメージ
　してるんですね。」
「予約もその流れでできるようにしたいんだけど、それはうち単独ではハードル
　が高い。」

「ホムペのデザインもやってるけど、あくまでも見た目部分だからなあ、、、。」

そう。うちにはそういう技術もノウハウも無い。どっかと組まないとなあ。

「わたしやりたいです。」
「えー、ウミノのくせに。」
「なんですかそれー！」
「じょーだん、じょーだん。期待してるから。一緒にがんばろ。」

うっ、枝豆あと残り３個！

ありゃ。なにこのタイミングで。
”　仕事おわた。いまどこ、誰と？”
あー！。

「ちゃんと、１っこ残してますから。っつーか、私たち社会人なんだから
　追加頼めばいいじゃないですか。」
「そんなには要らない。」

くっそー、ユキの馬鹿ー。

「だれさん、ですか？」
「ユキのバカタレ。」
「あー、ユキさん。呼びましょう呼びましょう！」
「じゃあ、シュラスコ頼んどいて。」

”いま、川べりのMILES。ウミノと一緒。”

「ちょっと、トイレ行ってきます。」
「どーぞー。」

ユキのやつ、どっからメールしてるんだろう。

”一人じゃないんだったら、今日は帰って寝る。ちょっとグダグダなの、
　ソーリー。”
ありゃ。ふられちゃったよー。

”ゆっくり寝れ。気ぃ使ってくれてありがとさん。”

いまの世の中、女はみんな大変なんだ。かつ、みんな優しい。

「ただいまぁ。」
「おかえりー。」
どんな会話じゃ。

「なにそれ！」
ウミノの後ろのそれ、ホールケーキじゃん、、、。

「お誕生日おめでとうございます。当店からのプレゼントですー。」
「うそうそ！ちゃんとお金払いました。」

ひえー、、、。

パッパラッパ、パーラー♩♩

うわ、店長のペットまで。

パッパラッパ、パーラー♩♩

まいったなこりゃー。
”ハッピバースディ、ディア・ショーコさん♩”

店中大合唱。なんかもう、、、、。
”ハッピバースデー、ツーユー”

幸せで、幸せすぎて、バカになっちゃいそうだよ。

真下魚名の既刊

京都路地入-kyotorogie

桜守りの庭　後編

Travelogue ep.6 嵐電 後編

Travelogue ep.6 嵐電

梅催い、雨模様

「passer un après-midi 10午後の過ごし方」

冬の手紙２

冬の手紙

空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou+4.5

空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou+4

ilminaria 2

ilminaria

Flower Garden Ⅱ

Travelogue _ ep.05 山へ行く

Flower Garden

Travelogue _ ep.04 蓼科へ

passer un après-midi 9　午後の過ごし方」

Monochrogue

passer un après-midi 8　午後の過ごし方」

passer un après-midi 7　午後の過ごし方」

空と菖蒲と、蓮と

空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou+3<

空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou+2

Travelogue _ ep.03 近つ淡海

passer un après-midi 6　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都水族館はペンギンで一杯です」

「passer un après-midi 5　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou+1」

Photo「花水硝」

「passer un après-midi 4　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです tou」

「passer un après-midi 3　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです Qu」

「passer un après-midi 2　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです nYa」

「passer un après-midi　午後の過ごし方」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです na」

「Travelogue ep.02 桜巡り」

ー　僕カノシリーズ　ー　バックナンバーズ

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で　夏」

「僕と彼女のアリア」

「黄金の麦畑」

1.Largo

2.Allegro molto

3.Adajo

「黄昏の王国」

イーリアス編

アリシア編

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです na」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです mu」

「Travelogue ep.01」

Photo「Hina」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです itu」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです yo」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです mi」

Photo「からくれないに ni」

Photo「bleu, jaune, vermillion」

Photo「H.45」

Photo「Fly me to Paris　Ⅰ～ⅩⅣ」

Photo「祇王　こけのころも」

Photo「空と雨と６月と」

小説

「ネガティブズ２」

「ネガティブズ」

Photo「空と僕と自転車とni」

Photo「空と僕と自転車と」

Photo「空と椿と木蓮と、そして花水木」

Photo「空と雲と、ぜんぶ鳥のいたずら」

Photo「空と雲と、ときどき春の野を行く」

Photo「空と月と、夜桜デート」

Photo「空と木と、ときどきの梅暦」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです ni」

Photo「空と窓と、京都の路地は奥に深いです」

Photo「空と木とたまに月」

Photo「からくれないに」

Photo「空と雲と、ときどき月」

Photo「夢みる桜」

ー　その他　ー

傘がない

夕暮れの赤ちょうちん

いもうと

サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス　あのころの僕たち

花舞い、名残り雪

詞画集「ただ憧憬れだけを」

画集　「彼と彼女の表紙画集」